

第2回 小中一貫・連携教育推進検討会 要点録

| | | |
|------|---|--|
| 開催日時 | 平成23年6月23日(木) 午後2時～午後4時 | |
| 会場 | 練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室 | |
| 出席者 | 委員 | 室地隆彦、小林福太郎、戸田了達、渡邊裕、伊藤隆、小野雅保、石神徹、長南良子、杉田正穂、蛭田江麻、阿形繁穂、古橋千重子、山根由美子、吉村潔、小暮文夫（敬称略） |
| | その他 | 統括指導主事 |
| | 事務局 | 新しい学校づくり担当課 |
| 傍聴者 | なし | |
| 案件 | <ol style="list-style-type: none"> 1 第1回要点録の確認 2 委員の交代について 3 (1) 小中学校の施設が分離している条件のもとでの、小中一貫・連携教育の考え方・具体的な取組 4 (2) 小中学校の組合せの考え方 5 (3) 小中学校の施設が分離している条件のもとでの、小中一貫教育校の学校経営および具体的な取組 | |

小林副委員長

皆さんこんにちは。副委員長の小林でございます。今日は議会が延びていて、まだ委員長がお見えになっていないということです。時間も限られておりますので、できれば進めていきたいなと思っているわけですが、委員長がお見えになるまで事務局のほうで進めていただこうかと思うのですが、いかがでございましょう。よろしいでしょうか。

- 異議なし -

小林副委員長

それでは、よろしく願いいたします。

司会

皆さんお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。新しい学校づくり担当課長の小暮でございます。もう20分か30分すれば部長のほうも間に合うかなと思ってございますので、それまで、私のほうで司会を務めさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

1 第1回要点録の確認

司会

それでは事務局のほうから、要点録について。

事務局

お手元に第1回の検討会要点録を置かせていただいております。事前に委員の方のお名前入りで送らせていただいたものからお名前を外した形になっておりますので、お目通しいただきまして、さらに修正点などございましたら、お持ち帰りいただいた後でも結構ですが、今日、明日あたりくらいまでにご連絡をいただければまた修正をいたします。特になければこのままの形でホームページに掲載させていただきたいと思っておりますので、後ほどお目通しいただければと思います。よろしく願いいたします。

司会

ホームページへのアップをさせていただきたいと思っておりますので、恐縮ですが再度ご確認をいただいておりますのでお願いできればと思います。

2 委員の交代について

司会

委員の交代ですけれども、実は5月26日付で区の部課長の人事異動がございました。今回、委員として出席しておりました施設給食課長が異動した関係で委員が替わるということで山根課長に替わったのですが、山根課長も今、部長と一緒に議会のほうに出ている関係で後ほど顔を見せると思っておりますので、替わったということで皆様方のご了承をいただければと思っております。

3 (1) 小中学校の施設が分離している条件のもとでの、小中一貫・連携教育の考え方・具体的な取組み

4 (2) 小中学校の組合せの考え方

司会

それでは本日の案件の検討事項のほうに入らせていただきます。「案件」の中の(1)から(3)までが今日の検討事項ということで、(1)と(2)の部分が前回からの引き続きということで本日、一定の方向性を出していただければ、ご意見がある程度まとまってくれば、と思っております。それから(3)の部分については時間的な関係もあるかと思っておりますが、入れるところまでお願いできればと思っております。(3)の小中一貫領域等の部分に関しては今回と次回で検討をさせていただけると思っております。

それでは、まず(1)(2)の部分の検討を、前回からの引き続きということで論点1ということで、皆様方にお配りをさせていただいております事前配布資料の中にございます。今後、練馬区で全区的に展開していこうとしている小中一貫・連携教育の定義付けといいますが、何をもちいて小中一貫・連携教育というふうな考え方を一定整理した上で検討してみようかということで、事務局のほうから論点整理の資料説明をさせていただきますのでよろしくお願い致します。

事務局

では、お手元にお配りしております検討項目（１）（２）の論点整理の論点１の部分をご説明させていただきます。

まず、この検討会では小中学校の施設が分離している条件のもとでの小中一貫・連携教育の考え方・具体的な取り組みなどをご議論いただくということになっておりますけれども、まずその小中一貫・連携教育とは何を指しているのか、これから練馬区で展開していこうという小中一貫・連携教育とは何かということについて再度確認をさせていただきたいと思っております。前回、もう既に連携というのはさまざまな場面で行われているという全体のお話をいただいております。前回いただいたその小中一貫・連携教育に関するご意見を１ページ目に列挙させていただいております。こちらは既にご了承いただいているかと思うのですが、後ほどお目通しいただければと思います。

２ページ目は現在、練馬区において既に実践されている小中連携教育の今時点での事例ということで、取り組み項目ということで挙げさせていただいております。校区别協議会は全校で実施されているものですが、ここに挙げられている交流ですとか合同行事というものは小中学校によって、ゆったりやらなかったりということになっております。

このような現状の中で、これから全区展開をしていく小中一貫・連携教育とはどういったことをやっていくのかということについて、まずこの委員の皆さんと共通理解を図りたいというところなんですけれども、前回お話にもあったように、いろいろな交流行事ですとかはさまざまやってきている部分はあるけれども、学校にとっての王道である教科というふうにご発言もありましたけれども、教科の部分での連携にはなかなか取り組めていないところがあったと。それから領域における連携で昨年度、小中一貫教育資料というのを作っていただいておりますけれども、そういったところの連携もこれからという段階かなというふうに認識しております。ですので今後、全区的に展開していきたい小中一貫・連携教育というイメージですけれども、事務局としましては３ページの下のほうにあります、「３．今後、練馬区で全区的に展開していく『小中一貫・連携教育』」、（１）から（４）までのこの４項目ではないかというふうに考えているところです。

（１）児童・生徒の計画的・継続的な交流というのは今もいろいろな小中学校で取り組んでいただいているところですが、これをまたさらに継続して発展させていければなと。（２）教員の計画的・継続的な交流というの、やはり授業ですとか、チームティーチングというところでやっていただいている小中学校もあるのですけれども、これもまたさらに広げていきたいと。そして（３）連続性・系統性のある教育課程、ここのところをメインに考えたいと。教育課程といっても幅広いものかと思っておりますけれども、こちらにある 課題改善カリキュラムの工夫 教科連携とも言えるかと思うのですけれども、教科連携の部分。それから、小中一貫教育資料の活用（領域における連携）、４つの領域ということで表現力、心の教育、体力、キャリア教育というふうに挙げさせていただいて、資料として全小中学校にお配りさせていただいているところですが、こういったものの活用。それから 指導方法における連携も考えられるのではないかと。ノート指導ですとか話し方指導ですとか、こういったところでの連携もあるのではないかとというふうに考えております。それから（１）（２）（３）とはちょっと違うのですけれども、これらを進めていくために、やはり「連携を進めるための学校運営」というのも必要なのではないかとということで、この（１）から（４）まで、これらすべてを全

区的に実施していくということを目指したいというのが事務局としての考え方になっております。こここのところをまず最初にご議論いただきまして、こういう書き方でいいのかどうか、こういうふうに書いてはあるけれどもどうなのかというあたりでご意見をいただければというふうに考えております。

同会

では資料について、3ページまでです。当区、練馬区が考えていく、これから進めていこうという前提として、小中一貫・連携教育というその大枠の部分についてということでございますけれども、(1)から(4)の取り組みというような形で資料を出させていただいております。この部分について何か、ご質問でも結構ですし、ちょっとハードル高いのではないかとかというようなご意見でも結構でございますのでいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

皆さん遠慮深いので、恐縮ですけれども私どもが勝手に指名をさせていただくこともございますので、恐縮ですがご意見とか、お考えの一端でもお聞かせ願えればと思います。

下石神井小は14年から連携教育ということで研究を含め取り組んでこられて、蓄積、継続されている中で、教科の部分についても分科会をつくって教科も含めての取り組みをされているかと思うのですけれども、指導方法の連携だとか、そんなような部分を含めて何かこんな実践をしているというようなことがあれば。

委員

事務局案のほうで3ページの3番の例示で4点ありますよね。これからまた委員の皆さんからもご意見いただけたらと思いますけれども、まあこんなのかなというところがありますが、これプラスアルファというか、一応考えていることもあります。

教科の連携というところでは、下石神井ですと平成16年ですか、「研究発表」という形で冊子にして、理数、社会、国語、芸術、体育という形で……。そのときに9年間の当初の学習指導要領のエッセンスをコピーした、指導の大事なものということで9年間のを並べたものはつくってはいるのですね。ただ、その後の発展というとなかなかちょっと難しく、言葉は適当かどうかわかりませんが、細々と各分科会で年に2回程度の交流・連携授業を継続してきました。それは、ある意味であまりグッとやり過ぎるとまた疲労感が出てしまうので、まずは着実に途切れないように、無理のない範囲で実践を積み重ねていこうということで行っているところです。

実際、6月のこの週は中学校の定期試験で、子供たちは午前中で帰ると聞いているので、連携授業とか交流授業を今週3本組んでいます。ただ、例えば小学校は4クラスあるので4つではなかなか難しい場合もあるのです。そういう場合には1つの授業をやって、例えばそのビデオを録るとか、中学生のアドバイスのビデオを録ったのをほかのクラスで示すというような形で、割と無理のない形で進めているということです。今週が社会と国語と音楽ですか、琴と紙芝居と食料生産ということで、子供とか教員の方に参加してもらおう。そんな形でやっております。

同会

はい、ありがとうございます。教科の部分で取り組んでいただいているということで。

いかがでしょうか、ほかにご意見等は。

イメージといいますか、共通の認識というのか、ある意味、私どもより先生方のほうが認識されている部分というか、もう共通認識されている部分もよくあるのかなという思いも一方にあるのですが、この会の委員ということで一定の認識ができればなというふうに。

恐縮ですが豊玉第二中には先日、私もちょっとお伺いさせていただいて、研修会ということで校區別協議会を1週間ずらされて、講演といいますか、お話を伺ってということで、それを受けてこんな形で研究を今年度から取り組んでいただくということで進めていけばいいのかなとか、あるいは小学校と中学校で教科担任とクラス担任というようなことで先生方のある意味、守備範囲が違うみたいな、交流といいますか、意識といいますか、なかなか難しい部分とか、取り組み始めはどうかと思っております。何かそのあたりで、講演会でのお話でこんなところを改善すれば何とかやっていけるかなとかいうようなお話がもしあればお聞かせ願えると助かるのですが。

委員

まず、今お示しいただいたこの(1)から(4)ですが、これを全区的に、つまり全小中学校で取り組むということですが、それができたら本当にすばらしいなとは思いますが。本校も今、小中一貫・連携グループの1つに入っているのですが、まさに今、(1)から(4)をやりたいところ、この中ではやはり、やり始めて今、実感しているところは(3)がやはりハードルが高いというか、ここが1つの難関だなというふうに思うのです。それは一昨日、本校は校區別協議会を、いわゆる小中合同の研修会という形に変えまして3校で取り組んだわけなんです。今までは授業を見合っ、そしてその後に各分科会で話し合っ、というのが今までの形だったのですが、今回は1回目として、まず小中一貫・連携教育の必要性だとか、意義というものをお互いに共通理解し合おうということで、外部から講師をお招きしまして 実践校の校長先生ですが、そういう方のお話、いわゆる小中一貫・連携教育の光もあり陰もありの、その実践の両面をお伺いした上で、それで3校どうやっていこうかといういわゆるスタートの段階を、この間、校區別協議会というものを借りて切ったわけですが、今、実際に中学校の立場で感じていることは、前回もお話したのですが、教科の連携というのが、やはりここが非常に大きな課題と受けとめております。ただ、今、学習指導要領が、小学校は1年早くスタートしておりますが、ちょうど変わる時期なので、時期的には互いの校種を超えて理解しようというこの時期はとて素晴らしい時期を迎えていると私は思いますので、ある意味この時期を逃さないほうがいいのではないかなというふうに思っているところでございます。

あとは教員の空気感というものが、やはり多忙感というか、先が見えない分、不安定な状況にはあります。けれども、これは講師の校長先生のお話にもあったのですが、私たち校長並びに、いわゆる学校の研究組織の中核となる人たちがコアとなって、シンクタンクというか、そういう部分をしっかりつくって、やはり不安のないような状況をつくらなければいけないんだということを強く言われたのが、私は印象的だったので、お利口な言い方になってしまうかもしれませんが、やはり引っ張る側のほうの強いリーダー性とか、そういうものが求められているなということは強く感じているところでございます。

同会

ありがとうございます。

お二人の先生から、ここでいう(3)の部分、連続性・系統性のある教育課程という部分については、ある意味本腰を入れないとなかなか進められないねということかと思います。特に教科の部分についてはそういうことかと思います。この部分につきましては、ここに「すべて」ということで事務局としては書かせていただいておりますけれども、この後の検討の中でこの「すべて」という中身をどの程度のすべてかという部分もあろうかかと思っております。というのは、教科といっても全教科の話なのかとか、領域の部分でもとりあえずいくつがいいのかとか、この(1)(2)(3)で(3)でいえば(3)の全部なのか一部なのか、あるいは段階的にいくのかとか、いろいろな考え方はあろうかかと思っておりますので、そういう面では現時点ではこの部分を論点1とさせていただきましてけれども、特にこの(3)を進めるところではある意味幅を持たせた形でいって、このところは整理をといいますが、この議論といいますが、論点1についてはここで一たん閉じさせていただきまして、次の論点2のところではこのこととの関連性は当然出てくる話でございますので、次の論点2とさせていただいた部分で皆様方のある意味実現可能性というような部分でご意見いただければと思っております。

それでは論点2の資料説明を。

事務局

では、続きまして4ページ以降の論点2のご説明に入らせていただきたいと思います。論点2につきましては小中一貫・連携教育でどのような具体的な取り組みをどのような組み合わせで進めていけばいいかということです。組み合わせと取り組みというのは同時に並行して考える部分があるかなと思っておりましたので、同時並行の形でこちらの資料を作らせていただきました。前回の第1回の検討会で取り組みに関するご意見、あるいはこういう組み合わせに関するご意見いろいろいただきましたところを4ページに記載させていただいております。こういったご意見の中から、事務局として組み合わせと取り組みとの関係について、ご提案をつくらせていただきました。

5ページ、6ページ、7ページと、A、B、Cというふうに振っておりますけれども、事務局としましてはA、B、Cの3つの組み合わせ、3つのレベルで3層の組み合わせを想定しております。Aの組み合わせというのが、校区别協議会の組み合わせですけれども、学校の通学区域が重なる小中学校は漏れなく組み合わせられている。ですので、非常に入り組んだ形の組み合わせとなっていて、小中ともに複数の連携相手がいるというような状況で組み合わせが重なっているというような状況です。練馬区の通学区域の設定からしてそういう組み合わせになっているということです。それが現状の校区别協議会の組み合わせとなっておりまして、実際その校区别協議会のほかに、小学校の児童さんが中学校に進学する際の情報交換ですとか、中学校の生徒会さんが学校説明をして小学校の児童さんが聞くですとか、部活動体験の日とか授業体験の日とかいろいろな取り組みが考えられるかなというふうに考えております。主には単発のという言い方がいいかどうか分かりませんが、年に1回、2回というような形で行われているものが多いかなというふうに考えております。連携の相手方が多いので、こういった形での取り組みになるかなという想定をしております。

6ページ、7ページのBの「小学校からみて、連携先の中学校が1校となる組合せ」のここ

るですけれども、これは前回の検討会でお話したように練馬区においては同じ小学校から複数の中学校に進学するという校区の設定が多くなっておりまして、小学校から見て2校、3校の中学校の中からどれか主たる連携先を1校選んでいただいて、その小学校から見て中学校の1校となる組み合わせを設定してはどうかと。それをBの組み合わせということで想定しております。このBの組み合わせというのは、小学校から見てどこか中学校を1校ということなので、小学校の選び方によって中学校がものすごく集中してしまったり、あるいは全然空いてしまったりということがあるのではないかと思われるかもしれないのですけれども、実際に組み合わせをつくっていないので何とも言えないのですけれども、空いてしまう中学校はないというふうに考えています。逆に集中してしまうところは出てくるかなと。どうしても中学校側が2校、3校、あるいは4校という連携先を持ってしまう可能性のある組み合わせですけれども、小学校側からするとまずは基本的に1校を選んでいただくという組み合わせの案になっております。中学校からみると1校のところもありますし2校、3校、もしかしたら4校のところも出てくるかもしれないというような組み合わせです。ただ、この組み合わせは練馬区内の小中学校全校が参加する組み合わせという想定です。

この組み合わせにおいて何が実施できるかということをご議論いただきたいというふうに考えておりますけれども、事務局としてはこの組み合わせで教育課程における連携ができるのではないかと考えていますのでいかがでしょうかというご提案です。この教育課程における連携、つまりは先ほど全区展開を目指しましょうというふうにお示しさせていただいた課題改善カリキュラムの工夫 いわゆる教科連携、あるいはの小中一貫教育資料の活用、領域における連携、そしてこの教科連携ですとか領域連携を進めていくために小中学校の先生方による連携推進組織として合同研修会ですとか連絡会というものがやはり必要でしょうね、というような設定になっております。これができればまさに全小中学校で教科連携、教育課程における連携ができると考えられるのではないかとというふうに想定しております。

では、その小中学校の組み合わせはどのように決めていくかということですが、現状の校区別協議会による組み合わせの中から、小学校側のほうでどこが一番の連携先となるのが適当であるかということをご想定していただいて、そして中学校側もいろいろな小学校と連携しなければならない、どこまでできるかというような協議が必要かと思っております。何をもちいて連携先を決めるのかということになりますと、小学校から中学校に行く進学者の数ですとか、連携にあたっての距離ですとか、あるいは歴史ですとか地域の状況とさまざまなことがあると思うのですけれども、そういったことを考慮して決めていくことになるのではないかと考えております。と言うのは簡単だけれども実際にどうやって決めていくのがいいのだろうかというふうにご議論をお願いしたいというふうに思っております。

次の7ページのCの組み合わせのところですが、これはBの組み合わせですとどうしても、中学校側からすると1校のところもありますけど、大体のところは2校、3校、もしかすると4校とかいうふうによくの小学校が出てきてしまう場合に、先生方が行ったり来たり頻繁に行き来をしなければならない、年間を通した乗り入れ授業ですとか、一緒に教えるティーチングですとか、あと学校運営というようなあたりで考えていくと、なかなか中学校側からすると幾つもの小学校と、という進め方が難しいのではないかとということで、Bの組み合わせの中から特に連携のしやすいところとのパイプを強くして連携を強めて、そこで発展的な連携ということで先生方による乗り入れ授業ですとかチームティーチング、そして連携のための学

校運営をしていただくという考え方がとれるのではないかというふうに、考えているところです。

この発展的な連携というのは、かなり先生方のお時間もいただくようなことになると思いますが、やはり中学校から見て1校、もしくは2校ぐらいになるのではないかというふうに想定しています。このようなA、B、Cと組み合わせの幾つかの層を考えまして、ベースとして校区協議会のA、これは現状もあるわけですが、今後、小学校から見て中学校というBの組み合わせを設定し、さらにその中から発展的などということで中学校から見ると1校、2校というような、そういう3層の組み合わせを想定して、それぞれで連携の段階があるというような考え方、ちょっとわかりにくいのですが、その組み合わせのレベルに合った取り組みをするという考え方でいかがでしょうかということです。

司会

ありがとうございます。

それでは論点2としてBとCというような形で、組み合わせのイメージ図と、それから具体的に取り組む中身といいますか、このようなレベルの取り組みでどうだろうかというようなことで、BをベースとしてCが発展形というような形で資料としてはお作りをさせていただいてございます。説明をさせていただいたのですが、説明した部分で何かご質問等があれば、まず最初にお伺いしたいと思うのですが、何かございますでしょうか。

部長が戻りましたが、しばらく私のほうで司会を務めさせていただきます。あと、冒頭申し上げました施設給食課長ですが、山根課長のほうに替わりましたので、ご紹介させていただきます。

委員

山根でございます。どうぞよろしくお願いたします。遅れまして申しわけございません。

司会

よろしくお願いたします。

それでは論点2、ここが一番大事な部分といいますか、このあたりからがある意味、今回の検討会で方向性を出していく大事な部分になろうかと思っているのですが、Bの組み合わせで提案をさせていただいているのが、基本的に小学校が1校の中学校を選びます、1校の中学校に限定します。中学校側からしますと小学校が1校から3校程度に絞り込む。絞り込むのもなかなか難しいのですが、徐々に絞り込むことを前提としてすべての小中学校で取り組もうとする小中一貫・連携教育。それは何ができるだろうかというのが6ページの上のほうで、Bの取り組みということで 課題改善カリキュラムの工夫、小中一貫教育資料の活用、として、 を進めるための連携推進組織というようなことで書かせていただいているものでございます。

恐縮でございますが、そうしましたらこの の小中一貫教育資料、これにつきましては昨年度、先生方のご協力もいただきながら小中一貫教育資料として1つのこのような冊子に、4つの領域について、表現力の育成、体力の向上、心の教育の推進、キャリア教育の推進ということでまとめていただいて、一定これに基づいて小中一貫教育を進めることができる程度可能な

かなということ、私どものほうとしては考えておるのですけれども、まさにこの一貫教育資料のキャリア教育の領域の部分をもとめていただきました、大泉中の校長先生よろしいでしょうか。キャリア教育をもとめていただいたのですけれども、領域の部分でこういうふうな一貫教育資料としてまとまっているものを使っての、先ほど申し上げました小学校は中学校1校が決まって、中学校は小学校が3校程度までというような組み合わせの中で進めていくことは、少しがんばればと言うのも何なんです、何とかやっていけるものでしょうか、どんなふうにお考えでしょうか。

委員

キャリア教育については大泉小学校の石井校長先生と、2年間にわたっている専門の先生方と、取り組み事例、具体的の実現可能な事例について、それから既に今、実践としてある程度成果の出た事例について論議をしていったわけです。普通考えると、1つの中学校があって隣の小学校と大体1対1というのが想定できますよね。そこでやってみて、近隣の小学校にまたふやすということもまた発展形としてできるのだけれども、中学校から2つ、3つの小学校に対して同時並行じゃあ実践してみましようというのは、なかなか簡単そうに見えて難しいですね。そうすると一番近いところとか、いろいろな土地の状況もあってやってみて、手ごたえがあり、それでやはりその学校の小学生だけではなく、また近隣のもう1つの小学校でもできるかなというところで話が進んでいったような気がします。リトルティーチャーもそうだったし、例えばボランティア活動で挨拶するですとか、朝8時ぐらいに小学校のところに中学生が行ったり、中学校のところに小学生が来たりと、近隣の物理的な条件というのがまたありますよね。そうするとある程度成果を出すとしたら、そういう成果が出ると思います。そこから始まったのかなと思います。

それで、なかなか難しいところはあるかなと思ったのですが、このパターンの中でどのような具体的な取り組みをどのような小中学校の組み合わせでやるかということが命題だと思うのです。それでどのような具体的な取り組みをとということで、キャリア教育を含めて領域における連携については、近隣のある1対1的なところが、現実問題としては多かったような気がします。ですので、今度は学習指導という内容に入ると、そういう距離的なものはある程度想定しなくてもできるのかもしれないけれども、学習指導的なそういう具体的な取り組みをどのような成果を想定して、要するにこれが実現すればこうなるんだなというのが見えていないとなかなか難しいかなという気がしています。ですので本来的には、僕らがいろいろお時間つくっていただいて2年間ぐらいかけて資料の形のものを作らせていただいたものがあるのですが、同じように学習指導の教科におけるものについても実現可能な実践事例とか、今、グループのほうでやっていたいものがあるのですけれども、そういうものがある程度出たときに、一般校というか、そういう研究に入っていないところは、そういうものを選択したり、発展形としてできるのかなと。ですので、学習指導についてはこうやろうという前提のところというのが大事になるような感じがしています。

同会

ありがとうございます。

そうしますと領域の部分については一定、資料もできていますという中では、それは例えば

3校と、大泉中さんの場合には3校で済むかどうかというのは悩ましい問題であるにしても、3校なら3校と、この実践事例は逆にいうと生かして始めることが、ある意味これがあればできるという受けとめでよろしいでしょうか。

委員

あんまり自信満々には言えないのですが、実際に今までやった内容の事例については近隣の小学校で……、例えばうちの場合には四小さん、六小さん、東校さん、大泉小さんと4つありますので、同時並行という考え方とか同時に進行するという考え方もあるけれども、まず取りかかりで近い大泉小さんでやって、それから東校さんとか四小さん、六小さんはその次にやるとか、それはやはり進行プログラムがあると思うのですが、ただ、やってきた手ごたえがある内容だから、1年間で結果を出すというのではなく、2年、3年という中期的な計画のもとにやるのであれば、これだけのテキストもありますので選択をしつつ改善して、自分はここの小学校との関係をよくしてできる可能性は十分あると思います。

司会

ありがとうございます。

この領域の部分については体力の向上の部分も1つのものとして挙げているところですが、体力といいますか体育の部分で小学校と中学校のつながりというような話では、体力の低下の課題がここ数年、もうちょっと前から言われている中で、この小中一貫教育資料に限定しませんけれども、体力の向上というところで、この小中一貫教育資料を生かすというのが、同じような質問で恐縮なんですけれども、小学校として特定の中学校と、あるいは中学校が小学校2校なり3校とやるような形というのは進めていける余地はあるのかという部分についてはどんなふうにお考えでしょうか。

委員

可能性はちょっとよくわかりませんが、体育の方では昨年、練馬区の体力向上検討委員会のほうでお仕事させていただいて、小学校の先生方、それから中学校の先生方と一緒に練馬区の子供たちの体力の低下が見られるというところで向上を図っていくというところのお仕事をさせていただきました。そんな中で小学校からいうと中学校の先生方との連携を図る機会をいただけたということは、すごくありがたかったなというふうにも思っています。

実際に今の体育の考え方からすると、小学校から高校までの12年間を4年間ずつ3つの大きなブロックに分けて、それぞれ系統性を立てて考えていこうというような流れになっています。小学校1年生から4年生までのブロックと、小学校5年生から中学校2年生までのブロックと、中学校3年生から高校3年生までのブロックというような形で4つに分けて、それぞれのところの動きを広げる段階ですとか、それから今度は運動に親しむ段階ですとか、今度は自分の好きな、自分の得意な競技を深めていく段階ですとか、こういうような形で分かれて体育の指導をしていこうというのが今、体育の流れで出てきているところはあると思います。

なので、そういう意味では昨年度の体力向上検討委員会では、6年生の研究授業とそれから中学2年生の研究授業があったので、ちょうど真ん中の4年間（小学校5年生から中学校2年生まで）のブロックの中の研究授業が小学校でも中学校でもできたというようなところでは、

体力向上面でこのような形で体育の学習を進めていくと、子供たちの体力が高まっていくのではないかなという、そのちょうど中間あたりのところの授業を展開できたのかなというふうにも思っています。そんなところで考えていくと、そういうものをモデルとしながらそれぞれ小学校、中学校の体育部のほうでそれを取り入れながら授業を広げていくという点では、連携というところはできていくのかなというふうにも思っているところです。

また先日、開進第三小学校で区の小学校の教育会のほうの体育の研究授業やった折に、たまたま近くの開進第三中学校で体育の指導をされているところということで、小学校の研究会の授業を中学校の校長先生が参観して下さるといようなこともあって、そんな折に交流なんかも体育の面でできているかなというふうには思っております。

体育の面からいうと、そのようなカリキュラムの系統性の中で連携というところを深めていって、今の子供たちの中でそういうふう育てていこうかというようなところの各教科の話し合いを教科ごとに深めていくことは可能ではないかなというふうには思うところです。

同会

ありがとうございます。

今、お2人の校長先生からの昨年度の一貫教育資料をベースにしたご意見をいただいたのですけれども、ほかの先生方から何か、今いただいた意見についてのお考え、先生方のところはこんな形で考えますというふうなものがあればいただければと思うのですが。

今回、特に一貫教育資料というのとは別に、まさに課題改善カリキュラムということで2教科以上に取り組んでいただくようなことをお願いしているのですけれども、課題改善カリキュラムの工夫といいますか、教育指導課のほうで研究グループのほうにお願いをしている中身のなものとか、また実際に事例等でこんな部分があったとかいうふうなお話しをいただけますでしょうか。

委員

今日はPTAの方もいらしていますので、もう1回整理をしますと、今、お2人の校長先生にお話しいただいたことが、今日の資料の6ページのBの図の 、 、 にございます。そこに「教科における連携」とか「領域における連携」と書いてあるのですが、今、お二人の校長先生がお話しになったのはこの領域における連携ということのお話だったんですね。それはどういうことかという、領域というのは例えば国語とか算数・数学とか社会とか理科ではなくて、例えば道徳とか特別活動とか総合的な学習もしたり、そういうところを領域というふうに呼んでいます。

練馬区では、先ほどお見せしたこの冊子が今、各学校にあります。今の子供たちに必要な課題ということで、例えばキャリア教育のお話がありました。生き方を考えていくというのが今の子供たちにはどうしても課題になっていると。それから心の問題、それから体力が低下している、それから表現力、こういうのが今の子供たちの課題になっているというので、「領域」を使って練馬区全体でこれを1年生から中学校3年生まで同じ考え方で指導していく部分を幾つか例示を挙げて指導していこうということをつくったものですね。これは今配られたばかりですのでもまだ温度差はございますけれども、これから1年、2年たっていけばすべての小中学校で実践されるということになると思います。

問題は、いわゆる国語とか算数・数学とか社会とか理科とか、こういう教科の部分。実は練馬区はその教科の部分で小学校から中学校までつなげて一緒に考えていこうということを今までやっていなかった。そこを手がけないと、やはり小中一貫・連携といったときには足りない。小学校の先生と中学校の先生が、小学校は小学校だけ、中学校は中学校だけという発想じゃなくて、9年間で子供たちを育てていこうという発想にならないと、やはり子供たちは伸びないだろうということがあります。

ここに「課題改善カリキュラム」と難しい言葉が書いてあります。これはどういうことかという、この小中一貫資料のように練馬区全体でこの教科版を作って、はい、やりなさいということも1つのやり方ではありますが、そうではなくて、むしろ教科については自分たちが教えている目の前のその地域の子供たちの実態にあわせてカリキュラムを工夫してみようということです。例えば国語を1年生から中学校3年生まで見たときに、どの部分に課題があるのか、そしてその課題を克服するためには1年生から9年生までのどの部分をこんなふうにちょっと変えたらいいのではないかとか、そういうことを考えたらいいのではないかとというのが、ここに書いてある「課題改善カリキュラムの工夫(教科における連携)」の意味です。

それをするためには、Bのところの「練馬区全体のイメージ」を見ていただきたいのですが、中学校1校について小学校が2つ、点線じゃなくて実線でくっついています。下のほうの中学校も実線で小学校2つとくっついています。この1個の中学校と2つの小学校、この実線でくっついているところ、1中2小であれば、この教科を考えるときに、例えばこの1中2小が1か月に1回、一堂に会して研究をして、それでは国語についてはこうしようとか、社会科についてはこうしようという研究ができるだろうと。これがあまりにも多くなり過ぎたり、例えば1中5小になったり、それから2中、2つの中学校と例えば4つの小学校とかいうふうになると、先ほどの小野校長先生のお話にあったように現実的には一月に1回集まってやるということはまず無理であろうと。集まれない、日程も調整できないということになるので、少なくともこのBの図のように1つの中学校と2つの小学校。まあ3つになってしまう場合もあるかもしれないけれども、すべてこのような組み合わせをつくって、その中で自分たちがかわっている子供たちの学力を伸ばすために国語はこうしよう、算数・数学はこうしようという、そういう話し合いをしていくことができる環境をつくっていくことがこれからは大事なのではないかというふうに考えて、この図が出てきているということでございます。

同会

今、指導課長からお話あったような形での課題改善といいますが、教科の部分について小学校と中学校のつながりを考えるということですが、今いただいたお話について何かご意見ございましたらお願いいたします。

委員

今おっしゃられた、教科に関してこういうものをつくって、それで統一してやっていくというようなことではなぜいけないのか、よくわからなかったのですが。

委員

これはいけないということではありません。そういうやり方をやっている自治体もございま

す。ただ、今日の資料の3ページのところの上の(3)に「課題」というふうに書いてありますが、この課題の 小中学校の教員の中に、9年間というスパンで考えて子供をどう見ていくのか、指導をどうするのか、学力をどうするのかという、そういうことを教員が意識することが大事だと書いてあります。この小中一貫教育資料の作成では、練馬区全体の中の一部の教員しか、この作成にはかかわっていません。そうすると一部の教員、そのかかわった教員についてはこういう指導観とか学力観とかいうものが変わるかもしれませんが、その他大勢の教員はこの作業にかかわらないので、この児童観とか生徒観とかいうものの改善がなかなか難しくなる。むしろこの教科については、どの先生も取り組んでいるわけなので、どの先生も取り組むような環境をつくったほうがいいだろうと考えているわけです。したがって区で1冊のものを作るのではなくて、それぞれの地域のところで地域の子供たちの実態に合わせた国語、算数をどうするかということを考える。そのときに先生たちみんながそれにかかわって考える。そういう環境をつくったほうが実質的な小中連携になるのではないかというのが今回の提案です。

ただし、それぞれの地域で作るにあたってのもとになる資料を教育委員会として作っております。教科を考えるにあたっての基礎的な考え方については、国語、算数、理科、社会など、全教科ごとに基礎資料を作っております、それは今年度、すでに各学校に配布しております。それに基づいてそれぞれの地域で考えてみたらどうでしょうかということ、今、研究グループには取り組んでもらっております。どちらがいいとか悪いとかいう問題ではないのですが、そういう考え方で今は取り組んでいるということでございます。

同会

よろしいでしょうか。教科の部分について、目の前の子供の例えば弱い部分について、小学校の先生も中学校の先生もその部分を見つめて、実際に自分たちで考えていただくというプロセスも大事だろうというのが1つあるのかなということかと思うのです。そのプロセスを経た形で指導をしていただいたほうがより意味のあるご指導もいただけるのかなということかと思えます。教育委員会なり、どこかでつくったものをそのままやっているという形も1つの方法ですけれども、それだとそれをつくっていく過程に先生方が入っていない、ご自身がかかわっていない。かかわることも指導観の中では1つ大事だろうということでの取り組みができればということかと思うのですが。

委員

私は事務職ですから学校の教育がどうかというのは全くわからないのです。ただ、今のお話を聞いていて、1つだけちょっと聞きたいのですが、小学校の先生と中学校の先生で決定的に違うことは、小学校の先生は全教科を教え、中学校の場合は専科があって今までは科目ごとに、教科ごとに先生が替わるわけですが、今のお話ですと児童観ですとか指導観とかという話のときに、中学校の先生は仮に5人、6人です、小学校の先生は1人という形になるのでしょうか。そういう先生方の共通のものをつくっていくという、こういう考え方になるのでしょうか。

委員

具体的な作業を進めるときのお話ですか。今、ここにお集まりの先生も何人かいると思えますけど、例えば先ほどの下石神井のところのやっている取り組みだと、5つの領域に分けてい

ます。例えば言語に関する領域というところに中学校の国語の先生が入って、小学校は全部教えていますからどの先生が入ってもいいということで1つの分科会をつくり、その領域についての小学校1年生から中学3年生までのことを考えていく、そういうことになります。どのような分科会をつくって取り組むかは、それぞれのグループのところで児童・生徒の一番課題になっているところを取り組む。だから、いきなり全部取り組んでいくというのはなかなか難しい、そういうことです。それは実例を挙げたほうがわかりやすいですね。

委員

今、その取り組むグループ分けをするところで悩んでいるのです。本校は今、いろいろな検討中ですけど、1つのやり方としてはいわゆる教科で、理科と数学という教科で1科1科やろうとしているのですけれども、そのときにそれにかかわる教員は中学校に当然いますけれども、理科と数学以外の教員はじゃあ教科以外のところで、例えば授業のノートとか授業規律とか、子供たちのいわゆる精神的な部分で共通理解を図るためのそういうグループを1つ作るということで、理科と数学以外の教員が入ってくる。中学校と小学校とのワークグループをつくるいいルートが、教科ということで何か壁みたいなものがありますね。だから、そのところのグループ分けというのがすごく難しい。

同会

今、おっしゃったように研究グループなので教科を研究してくださいとお願いをしているものですから、長南校長先生のところは算数・数学を1つ研究しますよと言ってくださいました。それとあと理科をやりますよと。中学校は専科ですから、それぞれ数学と理科の先生は当然そこに入る。小学校の先生は2つに半分ずつ入ってもそれで済んじゃうわけですけども、中学校のほかの教科の先生方が小学校の先生とかかわりを持って9年間のことを考えていく場が別に必要ですので、その部分について、領域という部分でやるのか、生活指導面のところでいくのか、その辺はいろいろ悩みどころ。あるいはもうちょっと広い範囲の部会みたいなのをつくってやるのかと、そんなような話になろうかと思えますけれども。

生徒指導とかというような部分で小学校と中学校、中学校のほうが一般的には厳しい生徒指導になりますねというような部分で、私も先日聞きかじった話で大変恐縮ですけども、そういう面では小学校入学時点から、中学校の生徒指導の部分についての情報提供を小学校に入学して1年生の保護者にもするような仕組みを取り入れる。そういう部会をつくって情報交換を先生方がしているものですから、小学校の先生がそもそも中学校がどんな生徒指導をしているか知っているものですから、その情報をもう小学校1年時点で、中学に行ったらこういう生徒指導になりますよ、今だったらこういう指導ですというようなことをあらかじめ保護者の方にも情報を提供できる。一例ですけども、というような形のつながりを持つというようなことも、そういう部会とかをやってつながりを持っていたらできますねと、こういうふうなことかと思えます。

下石神井小では5つの部会は何と何でやっておられるのですか。

委員

うちは全教科を5つに分けてやっているという形です。今の視点としては先ほど課長もおっ

しゃったように、教員の主観だけじゃないですけど、地域の子供たちを見た主観の中でまずはメモ書きというか、今の教員たちがどこを課題にしているのか、何を具体的にするのかというメモ書きで作って、明確にして今、取り組みもしているところではあります。

同会

そんな形で進められればというようなことでのBの部分でございますけれども、取り組みですが、その進め方といいますか、タイムスケジュール的に先ほど、小野校長先生のほうはある意味、小学校1校と中学校1校で実践してきたものを広げていくほうがやりやすいかなというようなニュアンスのお話をいただいたかと思うのです。そういう面では進め方の段階というような形での整理の仕方1つあるのかなと。BとCとの関係でいえば、CをやってからBに取り組むみたいな形の進め方があるのもいいのかなというご意見かと思うのです。

ここまでのご意見を先生方からいただいているのですけれども、小林先生、この辺にちょっと気をつけようがいい部分とか、こういった部分はちょっと気になる部分とか、何かございましたら。

副委員長

今いろいろご議論の中で感じたことは、まず論点1のほうでございますけれども、3ページに「今後、練馬区が全区的に展開していく」ということで3番の(1)から(4)まで示されております。具体的に、その中で今、(3)の、あたりのところの特性とか違いとかいろいろお話があったかと思うのですが、私はこれをそれぞれやっていけばさまざまな成果も上がってくると思うのです。しかしながらこれを進めていく際に、このプリントの一番上に書いてあります、これまでの「取組の成果」(2)の から ですね。要するに具体的には、3番の(1)から(4)のようなことをやると、具体的に(2)のようなことが期待できるんですよ、ということですよ。それは要するに学習意欲が高まって学力が向上するとか、進学に関しての不安が取り除かれるのだとか、こういったようなこと、これが実現すればこうなるんだよという1つの期待感なんですね。そうしますと先生たちも、それから今日、ここにいらっしゃるPTAの保護者の方々も、あ、こういうことが期待されるのだからこんなことをやってもらいたいなという思い、またはこんなことをやっていくんだという思いがより確かになると思うのです。したがって、それぞれの幾つかの取り組みを進めていく際には、具体的に見通しとして期待される効果はこういうこと、または何を指すのか、こういったものを指しているのですということをもう少し整理してわかりやすくすると、取り組む教師も、また保護者もいいのかなという思いが大変強くいたしました。

そのあたりがかけ離れていると、先ほどから一部出ておりました、先生からすると、どうしてこれをやるのかなという思いになったときに、疲労感というか、閉塞感というか、そういったものにとりつかれてしまいますと、ただでさえ忙しい状況の中で、なぜこれをやらなきゃいけないのかという、そういう思いに陥りがちなんですね。これは実は私自身も経験してきたことございまして、しかしながら先生たちは、こんなことが期待できるんだよ、これを目指すんだよということがはっきりすれば、かなり忙しい中でもがんばってやっていくんだと思うのです。逆に保護者の方からすれば、今の子供たちにもっとこういうものが備わってくるんだ、もっとこういうものが、成果として子供たちがより伸びていくんだということを期待されれば、

この一貫・連携教育に対する期待感や協力感も出てくるのかなと。そのあたりのジョイントと
いうか、つなぎをもっと鮮明に打ち出していくことがいいのかなということを1つ感じました。

それからもう1点は、論点2のところでは幾つかの組み合わせということで提案があったわけ
ですが、これについては正直申し上げると、やはり練馬区の実情というか、学区域であるとか
地域的な特性、これまでの歴史的な経過とかいろいろあると思いますので、一概にこれがいい
とか、これがマッチングするんだとかというのは、教育の在り方だけでは語れない部分もあるの
かなと、私はここで聞いていて感じたところです。ただ、そういうものを除いて、基本的には
こういうことが考えられるんだよと。それで具体的にこういう資料なんかも整備されておるも
のですから、実施に向けてはかなり条件整備は整っているのかなというふうに思いました。

ただ、ある意味ではこれをもっとわかりやすく、ちょっと言い方は悪いかもしれませんが、
もっと単純に、場合によっては部分的に絞るのか、または全体像をもっとわかりやすくするの
か、そういったところが見えてくるといいのかなというふうに感じたのです。と申しますのは、
私が幾つかの地域で勉強させていただいて、こういった同じようなことをやっているのを見ると、
例えばある地域では1校だけはモデル的にやりながら、あとは現状どおりと。それから全
区展開をやるようなところは、例えば品川などは最近の流れでは、施設一体型の一貫校は1つ
の学校。それから中1小1のいわゆる連携校が2つ目。そしてもう1つは小学校単独でやりま
すというこの3層構造にして、しかしながらこれをやるには選択制が必要になってくる。とい
うのは、3つのパターンがありますから、じゃあどれを選ぶのと。要するに一概に全部を区が、
または学校が勝手に決めるわけにはいかないの、その3つのパターンを示しながら、それを
選択できる余地を残して3つのパターンを示しているということなんですね。

練馬の場合は、そういった全体的なものを同じように進めていく際には、やはり産みの苦し
みというか、いろいろな部分があると思いますけれども、その難しさということですよ。で
すから、そのあたりのところをどちらの方向でいくのかということをしつづけばらんここ
で議論が成されればまたもっといい方向に行くのかなというような、そういう印象を受けた次
第です。

同会

はい、ありがとうございました。

本日、事務局が出させていただいている資料の中身から申し上げれば、ある意味、非常に欲
張りなものであるということになるのかなというふうに思っていますが、事務局的には小中一貫
教育と言われるものがいいものであるのであれば、すべての練馬区の小学生や中学生がその小
中一貫教育校の少なくともいいところの一部でもいいから、恩恵に預かるという言い方はちょ
っと語弊があるのかもしれませんが、その小中一貫教育に触れる部分があっただけいいので
はないだろうか。逆に言うと、そういうふうな形をある意味目指していくのも1つの在り方
かなということで、それをどういうふうにやっていくかということの中で一定、こんな考え方
の整理をさせていただいているところです。そういう面ではすべての小学校の子供がというこ
とを外すとだいぶ楽になるというのか、やりやすい部分は多々あるのかと思ってございますし、
そういう面では非常に厳しい部分はあろうかと思っておるのですが、そういった中でできる取
り組みを少しでもやっていければ、そこからバージョンアップとか、スケジュール的なもので
段階的に進めるとか、そういったことの中で進め方の部分でクリアできる部分があればすると

というようなことで本日のBとかCのご提案をさせていただいているところでございます。

Bのところ、私は冒頭、論点2をご議論いただく際に申し上げましたが、まず小学校が1つの中学校、まさに9年間の教育を考える取り組みをする中学校1つを決めるという組み合わせですということを申し上げました。その部分につきまして、中学校を1校に絞るということであれば、小学校と中学校の教育の質といいますか、レベルとしては向上させる目的でございますけれども、指定校といいますか、進学先の中学校が必ずしも連携先の中学校と一致するわけではないという状態になる学校が出てこようかと思えます。そういう面では、例えば大泉第六小あたりはそういうようなことで、保護者の方々、PTAの方のご意見をちょっとお伺いしたいのですが、大泉第六小を具体的に挙げて恐縮ですが、大泉中と大泉第二中と指定校が分かると、2つになるという状況でございます。これをやるということであれば、大泉第六小の先生方も非常に悩ましいでしょうけれども、その実効性を上げるために大泉中とやるのか、大泉第二中とやるのかを決めなさいいけないという、ある意味決めるという方向性の中で少しでも教育の質を上げていこうじゃないかということですが、理解を得られるでしょうか、いきなり聞いてもなかなか難しい部分はあるかと思うのですが、何か感想といいますか、こんな点で取り組んでもらっていないと具合が悪いだろうとか、私どもへのアドバイスでも結構でございます。何かご意見ありましたらお聞かせ願えるとありがたいのですが。

委員

うちはまさに第六小学校なんです、親とすると例えば具体的に年に1回程度、例えば、子供が大泉中に行って、何をするのかわかりませんが何かをする。あるいは大二中に行って何かをする。あるいは、どこかに書いてありましたけれど中学生が大六小に来て何かしてくれる。例えば年に1回とか、あるいは2回とかというぐらいの回数だったとしたら、前回、私がちょっと申し上げたような、この学校とは連携が強いけれど自分はこっちに行かなさいいけないという、そういう悩みみたいなものは多分、子供にはそれほど大きく生じないだろうという気はするのです。

しかも中学校に体験に行って、また中学生が来てくれると 今はそういうのはないんですよ。あるのですか。ありましたっけ。

事務局

学校によりますね。

委員

大六はひょっとしたらあるのかな。ちょっとわかりませんが、親としては子供の体験がいろいろふえるのでそれは歓迎できる。ただPTAの会長として言うと、先生方が忙しくなって、PTAとのかかわりが余計に薄くなるというか、時間がなくなって、ただでさえ保護者との連携というのは薄いのではないかと思うんですよ。それが余計に薄くなってというのはちょっと、学校単体で考えたときにはつらいなというところはあります。

同会

スパッと答えの出る話ではないことをお聞きしているのですが、ある意味、小学校の

先生なり中学校の先生が、小学校の先生は実際に教科も含めての連携・やりとりをする中で、中学校がどんな教え方をしているかというのを学んでいくということの中で小学校の教え方のレベルアップを図ったりするということのようなことが、ある意味研究といえますか、どの学校とそういうのをするかという部分になるかと思うのです。それが当然、どちらの中学校に行くにしても、小学校の先生の教え方としてレベルアップはするのだけれども、顔が繋がっているみたいな形になってくると、こっちの学校のほうが密度が高いね、みたいな形にはなるのかななんて思っています。

P T Aで、保護者の方もお忙しく支えていただいている方も限られてきている中で恐縮でございますが、P T A会長さんもお存じだと思いますが、それぞれの小学校の先生方も私が申し上げる以上にがんばっておりますので、引き続きお力添えいただければと思っております。

それからもう1点、逆に中学校から見ると、やるためには小学校の3校なら3校を絞り込まなきゃいけないという話になると、これは先生方も確かに悩ましいのですが、一方では、今、中学校は選択制ですので、そういう面では中学校に来られる小学校の方が本来だったら6校、一定のやりとりは今までどおりには続くのですけれども、連携が密なのが仮に3校だとすると、入ってくる子供たち 小学生で、希望されるのがひよっとしたら少なくなってくるかもしれないとかいろいろな要素が出てこようかと思うのです。そんな面も含めて、中学校のP T Aとして何かもしご意見あれば承りたいと思います。

委員

私も小学校のP T A会長を4年ほどやらせていただいて、今年でP T A 8年目になるのです。両方やらせていただいているのですが、豊溪小学校でもやらせてもらいました。それで思うことですが、私は子供のころから地域の学校ということで八坂中学校に、子供には4年生のころから、基本的に地域の学校に行きなさいと。選べるということじゃなくて、選べるかもしれないけれども、地域の学校に行きなさいということで子供には有無を言わず行かせました。それで中学校から見ると、今、先生を小学校からずっと見ていると年々、戸田会長がおっしゃったように出てこないのですね、いろいろなことに。P T Aの行事とか、そういった地域の行事とか。出てくるのは大体校長先生が出てきていただいて、それで場を取り繕っていただいているのですけれども、ただ、この中で先ほどの課題を一貫でやっていくという考え方はすばらしい考え方だと思うのですが、それをどうやったら成せるのかなと。これはもう私たち保護者がどうこう言うよりも、先生方とか行政のサイドのスタンスでやっていただくしかないと思うのです。

ただ、保護者としてお手伝いできるところといえば、僕も中学校ですから今度は逆に選ばれる側になりますので、交流行事とか地元の育成とかには私も一緒に行って、なるべくアピールをして、八坂中にぜひお出てくださいというような話はするのですが、うちの地域に関して言えば残念ながら、あと先生方も授業とか、うちだったら連携校で八坂小学校、豊溪小、それで八坂中学校という3校で年に3回、親子クッキングというのを、うちの栄養教員の方が中心になってやっていただいているので、交流行事はやっているんです。八坂小学校は隣ですから、それを通過して他の中学に行こうなんていう子はあまりいないので、八坂小学校からはほとんどが八坂中学校に来てくれてはいるのですけれども、豊溪小学校に関していえば、前回は申し上げましたけれどペアリングでいうと、谷原中学校か八坂中学校ということになっているのです

が、いろいろな活動をしながら全然違うところへ、光が丘のほうへほとんど行ってしまっているというのが現状で、その部分でなかなかこういう活動が、保護者にとってみれば、小学校の保護者の方にその学校はしがらみがあるから、これだけのつながりがあるからその学校に行かせましょうとか、付き合いがあるから行かせましょうという方向にいかないというのが今の小学校の保護者の動向だと思います。別な理由で、この部活があるからとか、悪いけど今行く同級生がいいとか悪いとか、そういうレベルのことから、あと八坂中学校は坂の下だから坂の下は暗いから行かせたくないとか、表向きには出てこないけれどもそういう理由もあったり、今、学校選択制がそういうところで保護者にとって運用されているというところもあるのですね。

今日のお話を聞いていたら、一貫教育というのはあくまで9年間を小中で これはどこかの小学校、中学校で過ごすのではなくて、一貫してやっていきましょうという考え方なのかなと私は今日、思ったのです。どこの小学校に行くにせよ、中学校に行くにせよ、同じような9年間というスパンで子供たちを育てていこうと練馬区は考えていらっしゃるのかなと思ったのです。その部分で中学校としては、うちも中学校へ行っちゃって今度は小学校はお客さんになってきて、「何とかこっちへ来てくださいよ」と言うのだけど、「いや渡邊さん、八坂中学校は給食はいいかもしれないけど、ほかにも選ばなきゃいけないものがあるんだよ」と言われちゃうと、特に中学校の校長先生や先生方は本当にお気の毒だなと。一生懸命ほかの中学校の皆さんもがんばっているのに、特色を出そうと思ってがんばっているのに、それが全然、関係ないところで選ばれちゃったり反映されていないというのが、僕は中学校とのかかわりをさせていただいてお気の毒だなと思っているのが本当のところですよ。

ですから、前回も申し上げましたけれども、部長も選択制のことは避けられないということでも前回おっしゃっていただいたのですけれど、その部分も考えなければならぬ。だから、私たちはまずは交流という感覚で見ているのですね。PTAとしてではなく僕が個人的な考えとしては、交流として見ている。小学校との交流をして、なるべくこっちへ来てもらおうというところで地域として子供たちを見ていこうと。この会では多分、学術的なほうが重きを置いて話をされているのかなと思っているのですが、その部分で意見をさせていただける面があればお話させていただきます。

同会

はい、ありがとうございます。

小学校2校、3校と中学校1校との組み合わせをしても、当然、学区内にはそれ以外にも、今現在、小学6年生に対しての中学校からの生徒会の説明だとか、あるいは部活動だとか、いろいろな形でそれぞれの中学校としての取り組みをされている部分もあります。それはそれで、交流的な部分で今、おっしゃっていただいた部分は継続していくことが前提の中で、できればそれも発展していく中で、どこかの部分を、教科なり領域も含めて学習面での部分をより強化する、レベルアップを図るための仕組みづくりというふうなことです。今、おっしゃっていただいたように9年間をどこの学校へ行っても、引っ越しもあるわけですし、ということで考えれば、区内のどこの小学校へ行っても、そこからどこの中学校へ行っても、基本的には変わらない。まして特区制度とかを使っているわけじゃございませんので、練馬区は学習指導要領に準拠してすべてやっていくということは大泉桜学園についても同じでございますので、そうい

う面での違いは出ないと、そういうふうに思っています。9年間を見据えたものをどうやってやっていくかということでございます。

委員

もう1つよろしいですか。

小学校から中学校に行かせる今の保護者というのは、まず部活なんですね。うちなんかはクラスが減っちゃったのでサッカー部が廃部になってしまった。子供はいるけれど、顧問をしてくれる先生がないから廃部になっちゃったのです。そういうところで「サッカー部がないから、じゃあ、ある学校に行きましょう」と。この会では学習とかそういった面ではすごく突き詰めているのですけれど、保護者の意見とかいうところの中で考えると、やはりそういう活動の面も、部活とかの面もちょっと考えてもらいたい。ここに書いてはあるのですけれど、最低限このスポーツはちゃんと部活として維持をしていかなきゃいけないようなものを考えていかないと、なかなか厳しいのかなと思っています。これは僕が必ず言われるのですけれど、「給食がおいしいよりも、部活があるか、ないか」と僕はかなりの保護者に言われましたので、それで笹目通りを渡られてしまったので、ちょっと申し添えておきます。

司会

はい、ありがとうございます。部活については練馬区としても努力していますから、それは別の機会にまたと思っております。

それでは、いろいろご意見いただいてきているのですが、Bの部分の取り組みとして全体に今日、ご意見をいただきました。そういう中で教科の部分といいますか、課題改善カリキュラムということで、その地域の子供たちの課題に向き合っていて進めていく部分についても、何とか全小学校で取り組むような形にぜひ持っていきたいなど。その部分では段階的な部分とか一気にというのはなかなか難しい部分もあるだろうというようなご意見もいただいたということで、本日の段階での一定のまとめ、1つの区切りといいますか、この部分についてはこんな形でまとめさせていただいてもよろしいでしょうか。

委員

先ほど大泉中の関係でちらっと出たのですが、実はいわゆる校區別協議会というのが、うちの場合にはすべて小学校が来て、国語についてどこがつかずいていて、中学校としたら今、その辺がとっても困っている。数学の場合でも正負の数が出て、この辺は非常に困っているとか、これはもう既にどこの校区でもやられているところなんですね。そういう意味ではやはり全方位外交じゃないのですけど、非常に必要なところだと。でも、1中学校1研究あたりから始めないと、なかなか焦点化できないと思うのです。ここにある小中連携研究グループもそうでしょうけれども、4つの小学校にポンとやるというのはなかなか難しいのですよね。それで1つ現実的な問題としては、例えば校區別協議会の中で各校長が集まったときに、今回、この2年間は数学の計算のところとか、かなり九九のところ難しいと。これは2年間にわたってお相手を決めて、1期としてやってみようじゃないかと。それで2期目として、言語のところ漢字と平仮名と文章のところなかなか難しいので、そこのところは2期として、そのときの実情に合った小学校と組んで研究をやって成果を出していく。将来にわたって固定的に取り組み

学校を決めることがいいのかどうか、そのところはやはり一考する必要があるかなと思っています。

私も中学校の校長であろうが小学校の校長であろうが、今、この子供たちがつまずいて、本当に暗い顔をして「先生どうしようか」というので、放課後残してやったりもするのだけれど、それを事前に小学校と連携しながら基礎・基本をつけてあげようと、いわゆる学力保証させるためには、まず数学からやるという学校があってもいいと思うんですよね。意見なんですけれども、その辺も含めてもう1つ考えていただけるとありがたいなと、現場のほうではそんな気がしております。

委員

私も今、小野校長先生がお話ししていただいたことにすごく賛成です。やはりやりたいことのニーズに合う、実際、組みたい小学校というか、それはやはりあるのですよね。本校は2校の小学校との連携ですけれども、今、私は自分でやりたいことの内容がちょうどぴったりそのニーズに合うのですよ。ですから今、とてもいい環境に、恵まれた状況にあるなと思うのですけれども、じゃあ今やりたいことをほかの学校の例えば1中4小学校というのでやれるかということ、ちょっとなというふうに思ったり、また課題はそれぞれ変化していくので、それが選択の余地があるとすごくいいな、おもしろいなと思います。

委員

保護者としますと、例えば大泉中がここから2年間は大四小だけど、その次は大六と何かをしますというようなことで順番が決まっているのであれば、たまたま自分の子供はそこに当たらなくても、そういうことで取り組んでいるのだなということに納得はできると思います。それが永続的にどこか1校とかとなると、大六小が例えば大二中と手を組むとかになった場合に、私の子供は大泉中に行くのだけど、すごく残念な気持ちになる気がします。ですので、現実を考えて順番にというのは私もいいのじゃないかなというふうに思います。

委員

そもそもの発想の中に本区の小中一貫・連携教育はより実質的なことをやりたいということがあります。今のお話も要するにどこかから言われたからやるとかではなくて、本当に算数・数学のこのことについて今、必要性があるからやっていくんだという、そのことが私は先生方のモチベーションにもつながると思うのです。今のお話は、校區別というのが小中連携校の一つのグループということになります。そして、その中に実質的な重点校ができる。それは固定的なものではなくて、年数を追って変わっていくものもあるし、1対1じゃない場合もある。実質的なものとしては1中2小ができるなら、それで取り組んでいきますよということだと思います。また、例えば2年間の取り組みが終わったら今度は別の課題に向けてほかの学校でやっていきましょうと、そういう形で校區別を一つの母体として活動していく、そういう発想ですよ、今のお話は、そういうやり方ということも確かにあるのかなと思います。

委員

うちは今、選択制ゼロになっちゃったんですね、ちょっといっぱい入り過ぎちゃって。ただ、

2年後、4年後、6年後に私は校長をやっていませんから、どういう状況で、どういう子供たちが出現するかというのはちょっと予測がつかないところがあります。今、中1の子供、今、中2の子供については今、ここが重要だというのは言える。ただ、研究というのはある程度絞り込まないとできないところがあるから、だから対象校、重点校を決めて、必ずそれは地域の小学校に還元すると。A小でやったことはB小には全然還元できないとかは絶対ないわけです。ただ、やはり研究するためには先生方の集中力というのが必要になりますね。

場合によっては数学が終われば国語の場合にはちょっと違った学校でやろうということも当然あり得ると思うのです。同じ学校で数学、国語をやるとか、社会をやるということもそれはあるかもしれないけれど、バランスを考えたら、こちらをやったら今度はこっちでやってみないかということも、それは1つの仮説として考えられると思います。この学校では言えるのだけれども、基礎・基本的なことを国語のもとでやったらこの学校でも言えるというのが必要になってくる場合もあるから、それはある種、学校現場の実践研究の余地ということで考えてやらせていただけるのであれば、教員も動かしやすいし、こちらの協同姿勢もとりやすいかなと。いろいろやり方はあると思いますね。

同会

そういう面では今回、教科について取り組むというのは当然、研究の話だと思いますので、研究の話となればある意味、1対1か1対2かという数目的話としても重点的にやらなければ成果がなかなか難しい。その成果を上げる相手の中では、特に今はご発言ありませんでしたけれども、先生方の実際に乗り入れ授業といいますか、その時点では出てくるというようなこともあるのかなということで、その後のCについてもご議論いただくかと思ったのですが、そういう面では根本的にBとかCとか言っている問題ではなくて、そもそも重点的な部分で、実のある連携を、特に中学校の先生はまずどこかの小学校の先生方とつくっていきこうと。それを関係する小学校のほうに還元していくんだというような手順で広めていくということを何年かサイクルでそれぞれの学校とテーマを決めてやっていっていただければ、小学校も6年間ありますから3校であれば2年ずつで一通り回ると。これも単純な計算でございますけれども、1回はやってくるみたいな。そういう面では一定、還元される。固定的なというよりは、練馬の学区域の状況からすればそういうようなやり方もあるのかなということかと思えます。

そういうことですので、順番的にどうかかというようなことはちょっと置きまして、論点整理として2 - 3とか2 - 4とかいうようなものをちょっと整理させていただいて、事務局から説明もさせていただきましたけれども、貴重なご意見をいただきましたので、改めてその中身を事務局のほうで整理を、私どもが現場の小中学校の校長先生方や先生方との関係の中でまとめさせていただいて、実質的に動かせるというか、やれる仕組みづくりというのが一番望んでいる部分でございますので、そういう形で進められればと思っております。

5 (3) 小中学校の施設が分離している条件のもとでの、小中一貫教育校の学校経営および具体的な取り組み

同会

残りの時間で大変恐縮ですが、もう1つの課題ですね。今回の検討項目の(3)の部

分で、これは小中一貫教育校といいますが、施設分離型の小中一貫教育校について事務局のほうから若干説明を入れさせていただいて、今日の時点で資料についてのご感想といいますが、ご質問とかを時間の許す限りでいただければと思います。

では、事務局のほうで説明をお願いします。

事務局

それでは今日、初めて検討していただく検討項目(3)のほうに移らせていただきたいと思います。まず、この検討項目(3)の論点1。施設が分離している小中一貫教育校における学校経営はどうあるべきかという論点でございます。大泉桜学園は施設一体型ということで開校いたしましたけれども、2校目、3校目の小中一貫教育校を考えると、施設一体型という条件の整ったところは練馬の現状ではなかなか見当たりませんので、2校目、3校目となると隣接型ですとか分離型になっていく可能性が大きいかと思います。その分離型の小中一貫教育校の設置にあたっては、都教委からの通知によって校長先生は1名にできないというのが現状です。ですので、校長先生が複数いらっしゃるという中で学校の経営はどうされるのがいいのだろうかということについてご議論いただければと思います。

その前に小中一貫教育校と小中連携校について一定の整理をこちらの1ページ目の表の中でさせていただいています。今後、全区展開をしていくと練馬区の小中学校というのは小中一貫教育校で分離型もしくは隣接型となるか、一貫校とはならず小中連携校という形のままになるか、あるいは桜学園のように一体型となるか、この3つのどれかに属するというふうに考えているところです。今までご議論いただいてきた練馬区で全区展開していく小中一貫・連携教育とは何かという部分については一貫校である隣接型・分離型にも当てはまりますし、小中連携校のほうにも当てはまるかなというふうに考えております。

ただ、一貫教育校というふうになりますとやはり一貫教育校としての一体的な学校経営が必要になってきますので、その経営のタイプとしますと、2ページ以降の先行事例を見ますと、主に2つのタイプがあるかというふうに考えています。まず、Aタイプは三鷹市の事例を3ページにお示ししています。三鷹市の場合は中学校1小学校2の組み合わせで分離型小中一貫校というふうにつくっていますけれども、3人の校長先生がいらっしゃる中で1名、学園長を教育長が指名しているという形をとっています。ですので、あと2名の校長先生は副学園長という位置付けになるというような仕組みです。学園長のもとに3校校長・副校長会があって、その下に学園幹事会ですとか3校合同委員会ですとか、いろいろな組織がぶら下がっているという仕組みになっています。

次のBの合議制の意志決定機関というBタイプ、これは佐賀市の事例ですけれども、4ページのほうに佐賀市の思斉館という。これは隣接型ですけれども、こちらにおいてはこの右下の図にあるように一貫教育推進会議という合議制の会議を設けていまして、こちらはお2人ずつの校長先生・教頭先生で構成されて、ここの合議制の機関で決定していくと、そういうやり方です。ですので、この思斉館のホームページとかお便りなんかを見ますと、お2人の校長先生が連名で出しているという形を、どちらが上ということはないというようなやり方でやっています。このA、B、三鷹のやり方、佐賀のやり方と、ほかにもあるかもしれないのですが、大きい2つのやり方があるようですので、練馬区で今後、分離型をつくっていくときにどう考えていけばいいのかということについてご議論いただければと思います。

続きまして論点2ですけれども、こちらは、じゃあ分離型の小中一貫教育校をつくっていくときに、練馬区で言う分離型の小中一貫教育校では何を、どんな取り組みをやっていくのか、どういうふうに応用していくかという意味もあるかと思うのですけれども、練馬区の場合、市民科ですとか英語科ですとか、そういう特別な教科をつくっているわけではないので、小中一貫連携教育を実施するのが小中一貫教育校ですよということになるのかもしれないのですけれども、そうするとじゃあ小中連携校とどう違うのですかと。どういうふうイメージをつくってほしいのか、何を取り組んでほしいのかというようなあたりでご議論いただければと思います。大泉桜学園のほうでは施設一体型ならではの取組がされているかと思うのですけれども、分離型ですと何ができるのか。練馬という小中一貫校のイメージについてご意見いただければということです。

同会

残り時間10分弱ぐらいになってしまいましたけれども、今の説明の中でまずご質問とかご意見とかあればお伺いしたいと思っているのですが、何かこの部分がわかりにくいとかございましたらお願いします。

施設が離れているので学校経営を一元化する、一体化するというのも非常に難しい部分も現実にあるかと思っておりますけれども、道路を隔てているというぐらいであれば、まあ何とか余地はまだあるけれども、という部分もあるかと思えます。そういう面では三鷹市については5分、10分離れている学校で、学区の位置付けの関係はございますけれども、中学校1校に小学校2校とか、大体そんなような形でされているかと思っておりますが、学園長というような仕組みがいいのか悪いのか多分、賛否両論あるところかと思うのです。

大変恐縮ですがご意見が出てこないようですので私が勝手に指名させていただきますけれども、校長先生方のざっくばらんなところのモチベーションといいますか、どうなのかなというあたりでご意見をいただければと思います。三鷹市の場合には学園長、副学園長と、校長先生なんだけれど副学園長と「副」が付くわけですね。そういうのってモチベーションとしてどうなんでしょうかというのがちょっと気にはなっているのですけれども、ざっくばらんなところで何か。

委員

確かに校長の職責として腕を振るうときに、さらに学園長がいるというところではちょっとやりづらい面も出てくるのかなと。特に教育課程の管理なども、自分が小学校の校長として決裁ができるかどうかということもありますので、確かにモチベーションが下がるのかなという思いもあるのですけれども。もう一つは、子供とか、子供にかかわっているよりよいシステムとして、システム論で見て、そうしたほうがより一体的な教育に進めるのであれば、それについては仕事で進んでいるわけですから、大丈夫なのかなと思います。

だから今、実際にその鷹南学園がどのようなシステムとして進んでいるのか。うちみたいに比較的やりやすい1小1中で、今、どんなふう動いていくかという、小の校長と中の校長とで、両方ともマルマルになったのが今、やられているんですね。こっちがマルで向こうがバツみたいなも実はあるのですけれども、それはやはり当然できないですから、実態的に合理的なものであれば何も学園長じゃなくて、佐賀のような仕組みでもいい。もう少し子供にとって

よりよい運営システムというのを突き詰めて考えてもいいのかなと思っています。

すみません、両方に足を突っ込んで……。

同会

ありがとうございます。三鷹市の実際に権限といいますか、学園長がどこまで権限があるかということについては、私ども事務局もちょっと情報収集をさせていただいて、資料を入手できれば次回にご提示をさせていただきたいと思います。

練馬区がやる時にどちらかにしますと、この場で一定の方向性を出そうというようなことでご提示させていただいているものではございませんので、仮に小中一貫教育校という形で分離型で決めさせていただき、教育委員会としてそういう方向性になったときに、それぞれの組み合わせとか状況によって選択する部分といいますか、どちらでいくかという一定の判断の部分もあろうかと思ってございますので、そういう面では三鷹市のパターンだとこの点がやはり重視しなきゃいけないよね、この辺が気になる部分ですよねというような、あるいはBも、合議制だとこの辺がちょっと気になるよねというような部分で、メリット・デメリット、もしお気づきの点があれば言っていただければということで、テーマの整理ができればいいのかなと思ってございます。次回に向けて何かお気づきの点があればあるようでしたら、ここにある論点1-1とか論点1-2という2ページの部分についてはそんな形でご意見を賜ればと思ってございます。

それから最後の6ページのほうになりますけれども、施設分離型の小中一貫教育校で取り組むことといいますか、これだけはやはり取り組まないと小中一貫教育校とは言えないだろうというような部分も、イメージ的な部分も含めてあろうかと思うのですが、突然のご指名で恐縮ですけれども大泉桜学園の蛭田副校長先生、一貫教育校で施設一体型で今、取り組んでいただいているのですけれども、施設分離型でもこんなことだったらやれるのかなというのが、まだスタートしたばかりで恐縮ですが、もし今の時点でイメージしているものがあれば、一言、二言いただけるとありがたいです。

委員

今日は教科の連携ということでお話がずっと進んでいたのですけれども、もちろん教科の連携ということは小中一貫教育校として連携も含めてやっていけることじゃないかなと考えています。また、これから桜学園としては一貫教育校として1回目の運動会、それから桜祭等々の行事に取り組むのですけれども、行事が一緒というのがやはり一貫教育校の特色になっているのかなと考えています。それに向けては文化の違いで、それぞれのやってきた児童や生徒への思いがたくさん先生方にもあるので、取り組んでいくのは大変難しいことだろうなと思いますけれども、それをすり合わせていくという感じじゃなくて、新しいものをつくっていくという感じで行事の取り組みとか、一緒に学習するという。異年齢集団の活動とか、そういうところをやっていくと、連携校というよりも一貫校だなというところが出てくるのかなと思いました。

あと今、クラブ活動にとっても子供たち5年生、6年生がとても張り切っているのです、部活動ですね、部活動というのも大きな特徴になるのかなと思います。

同会

ありがとうございます。

残り時間も少なくなってしまうので、恐縮でございますけれども全体的に、本日ご検討いただきました中身の中で、トータルで何かご意見でも。アトランダムで指してしまったので、指名しなくて恐縮な部分もあるのですが、何かご意見等ございますでしょうか。

では、恐縮でございます。行きがかり上、私がずっと司会を務めさせていただきましたけれども、最後に小林先生、今日の議論全体を通じて。

副委員長

最後の検討項目(3)ですが、今後、進めていく上でそれなりの悩ましい事態になってくるかと思うのですが、これはやはり先ほどの検討項目(2)のほうでしょうか、どういうタイプにしていくかというか、それにもよると思いますので、当然これは、(2)と(3)は連動して検討せざるを得ないのかなというふうに思います。

先ほどモチベーションと、管理職としてのモチベーションというお話がありましたが、石神校長先生からもお話ありましたように、確かに1人ではなく複数とか、または自分が副という立場になったときに、それがどういうふうに作用していくか。現実問題として、なかなかやはりそこら辺は難しいかなと。ですから、それぞれがいい意味での責任を全うできるような形がとれば一番いいわけですがけれども、それもどういう形で連携していくかによって変わってくると思いますので、また今後、検討していく必要があるかなと。

今日、総じていろいろお話出てきた中で、区教委として条件整備を進めていただいて、この連携・一貫に関してかなり力を入れていろいろな準備をしてくださっているわけですね。ですから、それをもとにするということが1つと、もう1つは、ここは連携してみたいな、ここが大事なんだとか、そういうご意見も出てきたと思うのです。例はよくないかもしれませんが、先ほど部活の話がありましたよね。じゃあ部活の連携って具体的にどこまであり得るのかなとか、いろいろな発想が今後またあるかもしれません。出てきたものをすべてやるというのはなくて、場合によってはそうしたことも検討しても、連携教育や一貫教育を進めていく上での、全体を押し上げる1つの重要なファクターになってくるのかなというふうな感じもいたしました。

いずれにしてもどういう形でその目指すもの、または期待される効果をそこに向けてやっていくのか。そのためには全体の機運を盛り上げていかなきゃいけないと思いますので、ここで出てきたようなものをもう一度整理してみて、集約してみて、いい方向に行けばいいかなというふうに感じました。

司会

ありがとうございます。慣れない司会でございましたが、突然の指名で皆様方には恐縮でございます。

それでは、次回に向けて事務局のほうで論点整理をさせていただきながら、また事前に資料等をお渡しできればと思ってございますので、よろしく願いいたします。では、部長、最後の挨拶をお願いいたします。

委員長

今日、臨時の議会が入ってしまいまして、30分ぐらいで終わるはずだったのが、遅くなりまして申しわけありませんでした。

最初からお話は伺えなかったのですが、1つ私が今日、はっと思ったのは、この6ページ、7ページの連携のタイプですが、実は事務局では固定的に考えていた。例えば7ページのところでも、将来的にはある中学校と小学校は固定的に太いパイプで結んでいくというような、そんな発想があったのですけれども、先ほど逆にいえば本当に将来的に全部固定しちゃっていいのかみたいな話もあって、場合によったら校区別協議会の中で何年間の中で、太いパイプになるところと若干薄いパイプになるところと点線になるようなパイプが何年かの中で変わっても、もしかしたらいいのかもしれないなというようなふうに思いました。これは個人的な感想なので事務局が「えっ」というふうに思うかもしれませんが、ただ、そういうやり方もあるのかと感じています。逆にいえば今のニーズにあるところはやはりきっちり、校区別協議会の中で、何校かの中でこの中学校とこの小学校と連携してやっていこうというようなことがあったっていいし、逆にいえば、もしかしたらそっちのほうが王道なのかもしれないなみたいな気もしたので、そこの辺も少し何か考えたほうがいいのかなというふうに、これは感想ですが、そんな思いをしました。

同会

時間も若干オーバーしてしまいましたが、本日はどうもありがとうございました。

(閉 会)